

I. 汽水域の生物と生態

3. 汽水域の仔稚魚の分布と生態:

マングローブ域は果たして魚類のゆりかごか?

河野 博

東京水産大学 魚類学研究室

Biology and Ecology in Brackish Water Regions

3. Distribution and ecology of larval/juvenile fishes in brackish waters:

Is the mangrove system really a cradle for fishes?

Hiroshi KOHNO

Laboratory of Ichthyology, Tokyo University of Fisheries

Konan, Minato, Tokyo 108, Japan

熱帯沿岸域は砕波帯、海草域、マングローブ域などで構成されるが、その中でもマングローブ域は従来から魚類のゆりかごとして注目を集めてきた。しかし、「マングローブ域が魚類のゆりかごである」というのは信仰のごとく唱えられている」という批判もある。

ここでは、こうした状況を背景にして、既存の研究結果を比較・検討することで、マングローブ域が魚類の生活史の中で果たす役割というものを考えてみる。

用いた文献はすべて公表されたもので、主に魚類相をアツかった約 15 論文と環境特性に関する約 10 論文、合計約 25 の論文に基づいて比較・検討を行った。比較した項目は、マングローブ域、砕波帯、海草域に出現する魚類について、科レベルでの出現頻度、出現量、幼魚の出現頻度・量などである。

マングローブ域で出現頻度の高い魚類としては、ボラ科、ハゼ科、フグ科などであり、また出現量が多いのはタカサゴイシモチ科、イワシ科、ヒイラギ科などであることがわかった。しかし、これらの魚類は砕波帯や海草域でも高頻度、多量に出現した。さらに、幼魚と成魚に区別して生息場所別に出現状況を比較したところ、マングローブ域だけに幼魚が出現する魚類はほとんどいないことが判明した。これらの結果から、果たしてマングローブ域だけに生活史の一部を依存する魚類が存在するのかどうか疑問が投げかけられた。

ここで、種レベルでの魚類とマングローブ域の関わりを知るために、Robertson and Duke (1990) の論文を紹介する。この論文では、主要魚種 20 種中、Mangrove-dependent あるいは Estuary-dependent と考えられる種類は 9 種であるとしている。さらに、種レベルでの詳細な研究例として、砕波帯でのキスとサバヒーの研究を紹介し、マングローブ域での魚類の種レベルでの詳細な研究の必要性を訴える。